IB DIPLOMA PROGRAMME
PROGRAMME DU DIPLÔME DU BI
PROGRAMA DEL DIPLOMA DEL BI

JAPANESE A2 – STANDARD LEVEL – PAPER 1
JAPONAIS A2 – NIVEAU MOYEN – ÉPREUVE 1
JAPONÉS A2 – NIVEL MEDIO – PRUEBA 1

Monday 10 May 2004 (afternoon)
Lundi 10 mai 2004 (après-midi)
Lunes 10 de mayo de 2004 (tarde)

1 hour 30 minutes / 1 heure 30 minutes / 1 hora 30 minutos

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Section A consists of two passages for comparative commentary.
- Section B consists of two passages for comparative commentary.
- Choose either Section A or Section B. Write one comparative commentary.
- It is not compulsory for you to respond directly to the guiding questions provided. However, you may use them if you wish.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- La section A comporte deux passages à commenter.
- La section B comporte deux passages à commenter.
- Choisissez soit la section A, soit la section B. Écrivez un commentaire comparatif.
- Vous n'êtes pas obligé(e) de répondre directement aux questions d'orientation fournies. Vous pouvez toutefois les utiliser si vous le souhaitez.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- En la Sección A hay dos fragmentos para comentar.
- En la Sección B hay dos fragmentos para comentar.
- Elija la Sección A o la Sección B. Escriba un comentario comparativo.
- No es obligatorio responder directamente a las preguntas de orientación que se incluyen, pero puede utilizarlas si lo desea.

問題　A

次のテキスト（a）と（b）について、共通点・相違点・主題を分析し比較しなさい。またその際、筆者が自分の考えを読者に伝えるために用いている文の構成、語調、言葉の象徴するもの、文体などの要素を考えに入れなさい。この二つのテキストの終りには設問がありますが、設問に直接に答える必要はありません。この設問を、単にコメンタリーを書きはじめる手がかりとして用いることも可能です。

テキスト　**1. (a)**

秋の日の午後三時

不忍池(しのばずのいけ)のほとりのベンチに坐って
僕はこっそりポケットウィスキイの蓋(ふた)をあける
晴衣(はれぎ)を着た小さなユリは
白い砂の上を真直(まっす)ぐに駈(か)け出してゆき
5　円を画(えが)いて帰ってくる

遠くであしかが頓狂(とんきょう)な声で鳴く
「クワックワックワッ」

小さなユリが真似(まね)ながら帰ってくる
秋の日の午後三時
10　向岸(むこうぎし)のアヒルの群れた辺(あた)りにまばらな人影

遠くの方で微(かす)かに自動車の警笛の音
すべては遠い
遠い遠い世界のように
白い砂の上に並んだふたつの影を僕は見る
15　勤めを怠(なま)けた父親とその小さな娘の影を

（黒田三郎「秋の日の午後三時」、『小さなユリと』、1960年）

（注）
黒田三郎（1919～1989）詩人。代表作として、詩集『死の中に』『失われた墓碑銘』『小さなユリと』、評論集『内部と外部の世界』などがある。

テキスト１（ｂ）

雲ひとつない秋晴れの日、電車で多摩川を越えるたびに私は思う。さぼっちゃおうかな、と。これから大学で講義をし、そのあとは溜(た)まりに溜まった原稿を書き、雑務をさばかなければならない。なのに、頬(ほお)を撫(な)でる風は爽(さわ)やかで、鳥のさえずりは私を心地よさげな河原へと誘っているようだ。せせらぎを見つめ、ビールでも飲みながら、ノスタルジーにでも浸っていたいと心は揺れる。休講すれば、きっと学生も喜ぶ。だが、迷っているあいだに電車は多摩川を越え、無情にも私をキャンパスへと運び去る。きっと世のビジネスマンたちも毎日、通勤途中に怠業(サボタージュ)への誘惑に駆られはするものの、実行するまでには至っていないのだろう。（中略）

人に迷惑がかかるとか、仕事が滞(とどこお)るとか、信用を失うとか、そんなことを考えていたら、怠業なんてできはしない。だが、ここでサボっておかないと、精神衛生上大きな危機を招くことになると思えば、一年に一度くらいのサボりは許されてしかるべきだろう。むろん、それは気紛(きまぐ)れに、突発的に行われるべきもので、予告なんてしたら、ただの休暇になってしまう。サボりが魅力的なのは、すっぽかしという軽い裏切り行為が含まれているからである。それを個人的なストライキと見做(みな)せば、雇用主や社会に対する抗議の意志を込めることもできよう。『罪と罰』の酔っ払いマルメラードフの時代から怠惰はロシア人の専売特許だったが、シニャフスキーという人がこんなことをいっている。

遅刻している時に立ち止まって空を見上げるのはいいものだ。

暢気(のんき)というか、優雅というか、人を舐(な)めているというか……かくいう私も実はこっそりロシア人の真似(まね)をして、遅刻しているのにわざわざ公園のベンチに腰掛けたりしている。

（島田雅彦「多摩川がささやく、『怠業！』」、2003.11.8 、朝日新聞）

（注）島田雅彦（1961～　）小説家。代表作に『優しいサヨクのための嬉遊曲』『彼岸先生』などがある。
怠業（たいぎょう）……サボタージュ。怠けること。
『罪と罰』……ロシアの小説家ドストエスフキィ（1821-1881)の作品。マルメラードフは『罪と罰』の中の登場人物。

－テキスト１（ａ）と１（ｂ）の筆者は、日常をどのように捉(とら)えていますか。

－秋の日の風景は、それぞれの作品の中で、どのような役割を果たしていますか。

－二つのテキストの主題・構成・文体などを比較し、それらが作品にどのような効果をもたらしているかについて、考えるところを述べなさい。

問題 B

次の二つの文章について、共通点・相違点・主題を分析し比較しなさい。またその際、筆者が自分の考えを読者に伝えるために用いている文の構成、語調、言葉の象徴するもの、文体などの要素を考えに入れなさい。この二つのテキストの終りには設問がありますが、設問に直接に答える必要はありません。この設問を、単にコメンタリーを書きはじめる手がかりとして用いることも可能です。

テキスト **2. (a)**

わたしに何か話せゆうても、木のことと建物のことしか話せませんで。

しかし、いっぺんには無理やから少しずつ、いろんなこと話しましょ。

自分のこと話すのは嫌やけど、宮大工(みやだいく)とか法隆寺や薬師寺の棟梁(とうりょう)というのがわたしの仕事だといっても、何するのかわかりませんでっしゃろ。

そのことから話しましょか。棟梁というものは何(なん)かいいましたら、「棟梁は、木のクセを見抜いて、それを適材適所に使う」ことやね。

木というのはまっすぐ立っているようで、それぞれクセがありますのや。自然の中で動けないんですから、生きのびていくためには、それなりに土地や風向き、日当たり、まわりの状況に応じて、自分を合わせていかなならんでしょ。例えば、いつもこっちから風が吹いている所の木やったら、枝が曲がりますな。そうすると木もひねられますでしょう。木はそれに対してねじられんようにしようという気になりまっしゃろ。こうして木にクセができてくるんです。

木のクセを見抜いてうまく組まなくてはなりませんが、木のクセをうまく組むためには人の心を組まなあきません。

絵描きさんやったら、気に入らん絵は破いてまた描けばいいし、彫刻家だったらできそこないやったら壊して作り直せます。しかし、建築はそうはいかん。大勢の人が寄らんとできんわな。だから、できそこないがあっても簡単に建て直せません。そのためにも「木を組むには人の心を組め」というのが、まず棟梁の役目ですな。職人が50人おったら50人が、わたしと同じ気持ちになってもらわんと建物はできません。

実際の仕事は、設計から選木、木組み、立てあげ、とこうなるわな。ところが、こういうふうに全部やるのはわたしだけや。今は設計は設計事務所、積算は積算屋がやりますやろ。分業になってますわな。

（西岡　常一「千三百年のヒノキ」、『木に学べ』、1991年）

（注）西岡常一（1908-95）薬師寺・法隆寺宮大工棟梁。
宮大工……神社・仏寺・宮殿の建築・補修を専門とする大工。
棟梁……大工の親方。

テキスト　2. (b)

木もぼくたち同様に生きものであることは、知識としては子どものころから知っている。幼木がいつのまにか育って、ぼくの背丈を越えてゆくのを見ても、木が生きているということは目に見えて分かってもいた。それが石や砂のような無生命のものとは違うと知ってはいた。

けれども、机や椅子(いす)や家の柱となっている木を、かつてそれがこの地上に生きて、大地の水や太陽の光で、そのいのちを脈動させていたものと見たことがなかった。大きくなった木が伐(き)られて材木になることに何の違和感もなかった。ぼくが子どもだった時代だと、かまどに薪をくべて釜(かま)で御飯を炊いていたが、木の一部分である薪を火のなかに投げ入れながら、それが命を持っていたことをちらりとでも考えたことはなかった。

十年ばかり前、五十歳前後のことだが、ある年の春、山のなかでおおきめのブナの木を抱いてみたことがある。そのころは、年齢のせいもあるのだろうが、木というものがやっぱり生きものなんだという感じがすこしずつ強くなってきていて、ひとりきりでいた静かな山で、木を抱き、木に耳をあててみたのだ。

しばらくは、森を吹きすぎる風の音や、風にざわめく木の葉の音が聞こえていた。遠く谷川を流れる水の音も耳に届いていた。

木にからだを合わせ、幹に片方の耳をあて、目を閉じていると、森のいろんな音が聞こえてきて、それがかえって静寂を感じさせ、気が澄んでいった。登山道からはずれた森の奥だったから、人間の気配はどこにもない。だれにも見られることもない山中で、ぼくの頭はだんだん空っぽになっていった。何も考えない。春の山の空気が心地よく匂(にお)っていた。

ゴホッ、ゴボゴボ、ゴボッ、ゴボッ……。

どのくらい経(た)っていたか、突然、木の内部からぼくの耳に水の音がひびいてきた。（中略）

いったん聞こえだすと、木の内部を流れる水音はやむことがなかった。

春の朝、木が大地から水を吸い上げて、枝々の若葉へ運んでいる音なのだろう。何年かあとに、お医者さんの使う聴診器を木の幹にあてると、木のなかを流れる水の音が、すぐによく聞こえると知ったけれども、その朝のぼくの耳には、ぼくの頭が空っぽになってから、流水音が聞こえてきたのだった。

－－－木は生きている。

強い実感だった。

（高田　宏「木は生きている」、『森へ行く日』、1996年）

（注）高田　宏（1932- ）エッセイスト、小説家。
かまど……なべ・かまなどをかけ、下から火をたき、煮たきするための設備。
ブナ……ブナ科の落葉高木。高さ20メートル以上に達する。

— テキスト 2. (a) と 2. (b) の筆者は、「木」についてそれぞれどのような考えを持っていますか。

— 二人の筆者は、「木が生きていること」をどのように表現していますか。

— 二つのテキストの文には、どのような工夫や特徴が表れていますか。